

ICC（国際地図学会議）2019 東京大会を終えて

ICC2019 東京大会組織委員会委員長 森田 喬

はじめに

ISPRS（国際写真測量リモートセンシング学会）の京都大会が開催されたのは1988年の7月の事であった。それから約30年が経過しているが、その前の1980年にはICA（国際地図学協会）の東京大会が開催されている。今回、ICAが主催する第29回国際地図学会議東京大会（ICC2019Tokyo）が、約40年ぶりに2019年7月15日から20日までの6日間にわたって、東京お台場の日本科学未来館および国際交流館（平成プラザ）を中心（図1）に開催され、75カ国から約1000名の参加登録があり、またその7割以上が外国人であった。

会議は、“Mapping Everything for Everyone”との東京大会組織委員会で決めた統一標語のもとに、44の多様なテーマにわたって約520件の口頭発表、および約130件のポスター発表が

行われた（図2）。また、本大会の統一標語から導かれた“ネット環境活用によるオープンソース・データ”、そして“SDGs”（図3）に関する基調講演が4件行われ、更に“地図的分析手法”、



図1

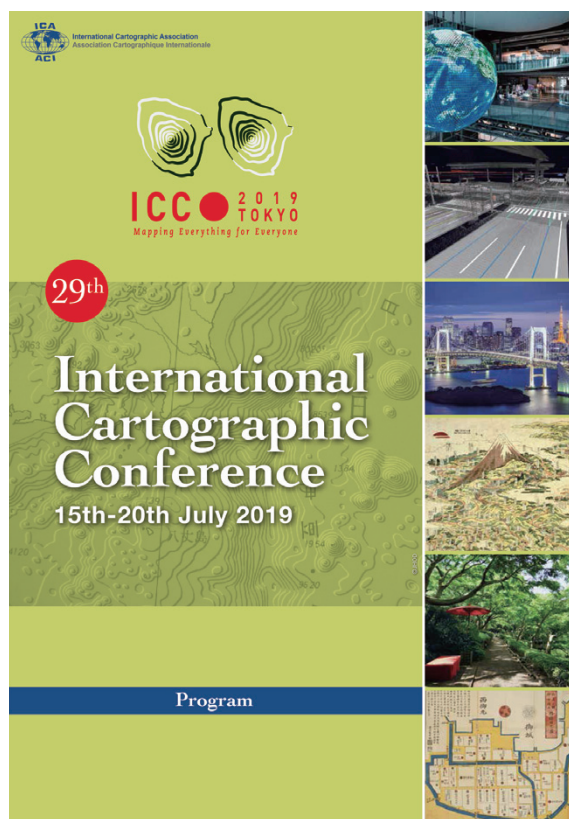


図2



図3

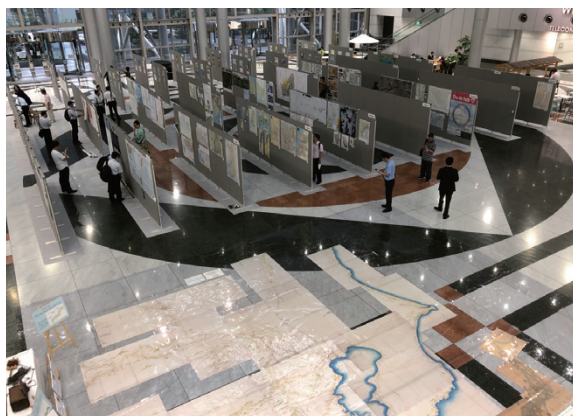


図4

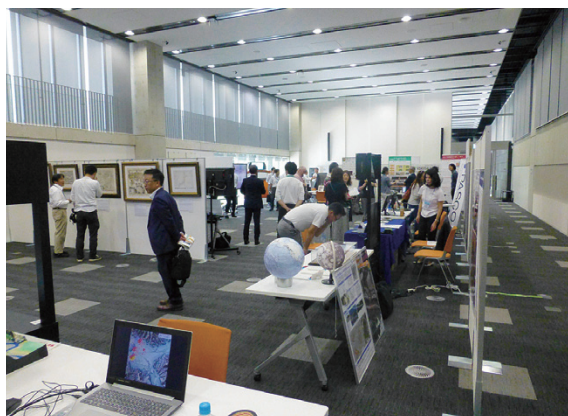


図6



図5



図7

および“ビッグデータ”について特別セッション2件が行われた。

また、同時開催の国際地図展には30カ国から約400点、国際子供地図展には33カ国から約200点の出展があり(図4)、日本は、国際地図展の「その他地図作品部門」で優勝、および「海図部門」で2位を受賞した。また、企業展示には内外の22の企業・団体・グループからブース出展(図5)があった。

更に、隣接する会場において日本の地図分野の現状をアピールするために日本地図学会の定期大会を併催し、また産業界を中心に結成された“地図コンソーシアム”による企画展「日本の地図の過去・現在・未来」(図6)が開かれ、上記の企業展示とは別に日本の地図作成・利用の時代の先端を行く技術力について紹介した。

なお、開会式(図7)には秋篠宮皇嗣殿下・

同妃殿下のご臨席を仰ぎ御言葉を頂戴したほか、国際地図学協会会長、日本学術会議会長、および組織委員会メンバーによる歓迎の挨拶、そして国土地理院院長、内閣府科学技術担当大臣、内閣総理大臣(メッセージのみ)からも祝辞があった。また、会期中に国土地理院、海洋情報部、国会図書館などへの技術巡検が組まれ、大会後にはポストコングレスツアーが数本実施された。

このように国内の個別の学会では得られない、国際色豊かな大規模で多彩な会議となり、このことは日常的に行うネットを通じた情報収集とは違った、実空間としての会場の中での実体験に基づいたより包括的な知識獲得の場が提供されたことになる。以下、今後の展開に向けて大規模な国際会議の開催意義について検討を加えて見たい。

多様性の組み立て

上記のように研究発表、基調講演、特別セッション、国際地図展、企画展、企業・団体ブースなど、大会の内容は盛りだくさんであった。それでは、研究発表のテーマの広がりはどうだったであろうか。これには発表分野の括りとなるセッションテーマの広がりを調べてみるのが分かりやすい。一番多いのは“地理空間分析とモデリング”の15セッション（以下括弧内の数字はセッション数、1セッション当たり約4件の発表）であった。ついで地図学・GIS・リモートセンシングの方法と応用（9）、地図教育とトレーニング（6）、地図アトラス（6）、地図デザイン（6）、地図学の歴史（6）、地理情報の視覚化と認知的課題（5）、オープンおよびクラウドソースの地理情報（5）、都市の地図化（5）、地理的方法の視覚化と分析（5）、地図利用における諸課題（5）、アートと地図表現（5）、地図の総描と多段階表現（4）、ビッグデータとデータ科学（4）、地図遺産のデジタル化（4）、地図とインターネット（4）、位置情報サービス（4）、危機管理と地図（3）、子供と地図（3）、環境の地図表現（3）、視覚変数とデザイン（3）、人文情報学とGIS（3）、視覚分析手法（3）、地名学（3）、地図とゲーム（2）、AI・ロボット・自動運転と地図作成（2）、理論地図学（2）、SDGsと地図（2）、地図作成の近・現代への移行（2）、地形図作成（2）、空間データ基盤と標準化（2）、山岳地図（2）、視覚障害者対応の地図（2）、地図投影法（2）、地図作成と地理情報のマネジメント（2）、（1セッションのみは略）となっている。

測量・地図・GIS分野は、日本においてはそれぞれ個別の専門学会を持っている。しかし、上記のテーマの並びを見ると、今回の大会は地図を主体としてはいるが個別学会を跨ぐような多様なテーマが揃う大会となっている事が分かる。これらは、測量、地図、GISのそれぞれの分野で従来からデジタル化の流れのなかで扱わ

れてきたものであるが、これらの三分野は方法としては似ていても各々が目的とするところが異なっているために我が国においてはお互いの交流が限られてきた。国際的にみてもその重なり方の程度は国によって様々である。ところが、このように一堂に会して俯瞰的にみると共通部分が多くあることが認識出来る良い機会となった。また、“オープン・クラウドソース”、“ビッグデータとデータ科学”、“危機管理”、“環境”、“AI・ロボット・自動運転”、“SDGs”、“空間データ基盤と標準化”、“マネジメント”など、デジタル化によって進展する社会やユーザが求める空間情報を“社会的な仕組み”として如何に提供するのかというテーマも共通課題として挙げられている。一方、地図の分野はユーザとの距離が近いので“視覚化と認知的課題”、“地図利用における諸課題”、“アートと地図表現”、“地図遺産のデジタル化”、“位置情報サービス”、“子供と地図”、“視覚変数とデザイン”、“地名”、“視覚障害者対応”、“地図投影法”、と言った表現やコミュニケーション、さらにはユーザの認知レベルまで深化させ対象の理解のみならず動機付けまでが扱われている事が分かる。これらの多様に広がるテーマの存在に気づくことは、この分野の再構築を含む新たな展開につながる可能性を感じさせてくれる。

実感性の持つ可能性

大会に参加すれば五感を総動員することによって文字を通した文献を越えたトータルなものが実感できる。この実感を通した情報獲得は、研究発表における実際の会場のプレゼンや質疑のやりとり以外にも、国際地図展、企画展、企業・団体展示などにおいて“見て触れる”展示物が多くあり、目の前にある実際の展示物を利用してコミュニケーションを図るという状況を提供されることにもなった。特に地図展における数百点にものぼる展示は、それらの比較を

通して単独の地図1点だけでは得られない興味深い地図の世界を俯瞰的に醸し出すことに成功していた。また、会場がゆりかもめの駅に直結したビルの中央の吹き抜けのアトリウムを用いて行われたので、通りかかっただけで目に付きやすく一般の人々が立ち止まることも多かった。また、開会式直後の秋篠宮皇嗣殿下・同妃殿下および悠仁親王が加わったご家族での地図展鑑賞のシーンが翌日のテレビのニュースや新聞で一斉に報道されたことにより広く一般の知るところとなり、4日間で少なく見積もっても約5000人の入場者があり地図のパワーを一般に向けて大いにアピールすることになった。

また、技術巡検やポストコングレスツアーにおいても、現場を訪れて実体験を通して日本の文化的特徴を含んだこの分野に対する総合的な密度の高いコミュニケーションが行われた。

このような総合的なコミュニケーションの仕組みは、外国人の来場者が日本人の3倍に上ったから、至る所で効果的に世界各国の人々と交流ができる環境を提供することになり、また外国人にとっても日本人との交流のみならず外国人相互のコミュニケーションにも大いに寄与した。また、日本人が全体で150余りのセッションのうち35件のセッション・チェアを務め、各々のテーマにおいて各国からの発表者によるディスカッションを運営したから国際的視野の広がりのもとに現況認識ができる良い機会となった。

大規模国際会議の開催意義

国際会議は、従って開催期間中に実空間の中に繰り広げられ配置される様々な形態の情報知識に対して、それらを参加者が各々の全神経を傾注してセンシングして廻り、さらにコミュニケーションを図るという全体的・総合的な仕掛けとなっている。今回の日本開催は、先端技術と伝統的文化が併存しているのが日本の特徴だとすれば、それを容易に実感・センシングで



図8



図9

きるような工夫も行った。コングレスバッグを古地図や浮世絵をあしらった和風デザイン（図8）としたこと、大会のロゴマークを世界的に知られている田中吉郎の彫塑的水平曲線地図法（1939年）による富士山としたこと、会場のお台場地区が未来都市的な景観であったこと、モバイル用の各種デジタル地図案内や高密な交通機関に対するデジタルサイネージが多く見かけられたこと、企画展「日本の地図の過去・現在・未来」を実施したこと、開会式、レセプション、ガラディナーのアトラクションが和・洋の対比の演出であったこと、更にポストコングレスツアーでは東京から離れて日本文化・景観が体験できたこと等、日本らしさを感じ取る機会がさまざまに提供された。

もう一つ忘れてならないのは、人の交流の場には飲み物と食事の用意が必要であるというこ



図10

とである。いわゆる同じ釜の飯を食うことはコミュニケーションを大いに支援してくれる。本大会では、初日のアイスブレイカー（図9）、毎日のコーヒブレイク、各種のレセプション、最終日前日のガラディナー（図10）の提供が行われた。アイスブレイカーでは、初日の研究発表が終わったあと未来館の巨大なLED地球儀のジオ・コスモスの下に集まり、和洋混成のバンドの演奏のもとに軽い飲み物と食事をとりながら、参加者同士が旧交を温め友人を紹介し合った。コーヒブレイクは、研究発表会場の近くに設けられたセルフサービスの喫茶コーナーとして提供されたが、研究発表の後の気分転換の場であるが、発表で議論が白熱した場合には場外の意見交換の場ともなった。レセプションは、ICAの新旧執行部のすき焼き弁当による昼食会、次回開催地のイタリア・フィレンツェ主催の立食パーティ、審査により渡航費補助を受給した若手研究者のための簡単な飲み物による懇親会、などが開催された。ガラディナーは有料の晩餐会であるが都内の八芳園で約250名の参加のもとに行われた。ステージで行われた各種アトラクションの中では神楽坂芸者の踊りと演奏が好評であったが、食事は和牛ステーキであった。なお、毎日の昼食の提供については懇親の場ともなるので色々な角度から検討したが結局提供しなかった。過去の大会を振り返ってみても、その有無はまちまちであり、必須で

あったのは安全上外に出かけられない場合や、近くに食事用の場所が無い等の場合であった。東京はそのどちらにも該当しないし、むしろ東京の持つ食のバラエティーを各々の工夫で見つけてもらおうということになり、レストランや食堂の場所を記載したランチマップを提供した。

また、このような実感を刺激する場の提供は、若手の啓発・育成にも役立てることができる。今回の大会は日本学術会議ICA小委員会により組織委員会が編成され学会を中心に組織化と運営がなされた。しかし、実施に当たっては産官学のバランスが重要であり、大学関係者以外にも学会活動に熱心な、産・官・教育関係のメンバーが加わるとともに、企業関係の人々が活動しやすいように“地図コンソーシアム”が結成され企画展が行われ、また企業・団体展示も実施された。そして、これらにおいては特に若手が実働部隊として徐々にモチベーションを高めながら意欲的に活躍した。また、研究発表においても、日本からの発表は100件以上を数え、多くの若い世代が英語による口頭およびポスターの発表を行った。従って、このような共通体験は、近い将来、再びこのような国際大会が開催されるようになって産・官・学に跨がる経験者のネットワークを構築することにより適切に活かすことができるであろう。

おわりに

大きな国際会議の持つ多様性と実感性の重要性について強調してきたが、当然ではあるがモチベーションを持って主体的に関わるか受け身であるかで効果は違ってくる。特に今後の展開のためのシーズ探しにおいては、主体的な眼力を持たないと見るべきものが見えてこないであろう。そして人とのコミュニケーションを通じた気づきも重要である。この点で、本大会が面白かったという感想を多く聞くことができた。これらのポジティブな経験が若い人を中心にこれからの新たな展開に発展することを期待したい。